

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

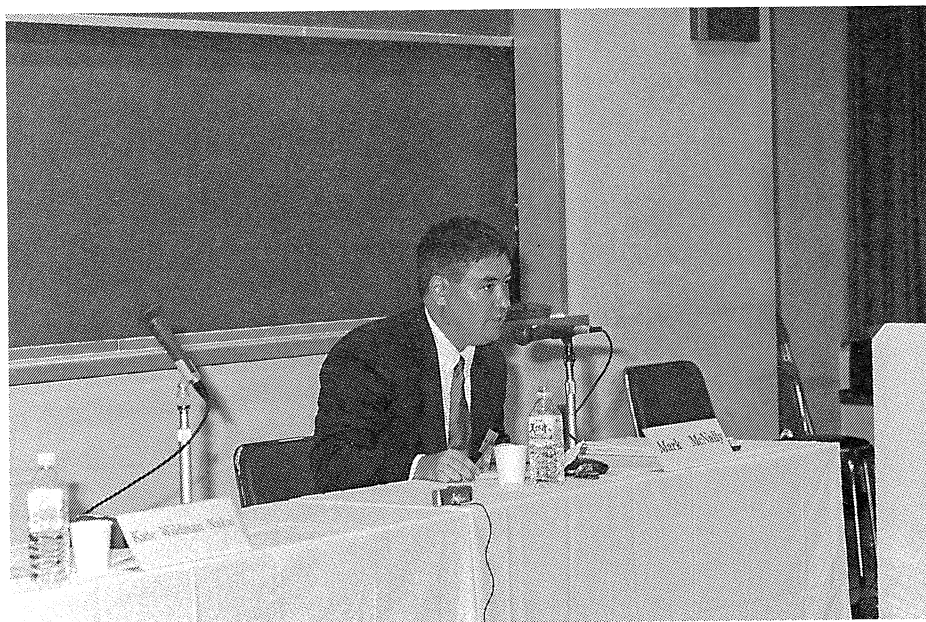
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン=ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

〈神道〉はどう翻訳されているか

＜発題 2＞

解釈学的な算術としての国学の翻訳

マーク・マクナリー

[illegible]

【司会（中井）】

きょうの2人目の発表者は、マーク・マクナリー先生です。マクナリー先生は、カリフォルニア大学のロサンゼルス校で学位を取りまして、いまはハワイ大学の歴史部で日本史を担当していらっしゃいます。ご専門は国学、特に平田篤胤を専門にいらっしゃいます。『三大考』論争の論文も発表されていますし、来年、ハーバード大学のアジアセンターから篤胤についてのご本が出る予定です。どうぞ。

発題

マーク・マクナリー

ありがとうございました。ジャック・デリダ(Jacques Derrida)というフランス人の哲学者は、翻訳が基本的に不可能であると言っている。¹この観念は、西洋の言語の場合互いに似ているので翻訳も不可能ではないと言えるが、もし2つの言語が遠い関係にあり、または関係していない場合に問題になるということを意味している。その翻訳の困難さは、非常に異なった文化を持つ言語の翻訳であればなお増加する。神道を英語に翻訳することの難しさはそこにある。神道を研究する上での国学の分析は、英語を母国語とする研究者にとっては頭の痛い問題である。

一方、アメリカでは神道は宗教として把握されている。しかし米国の文化史の中には同じようなものがないので、細かいことまで理解されていないのが実情である。このため、アメリカには国学と神道の区別を理解する研究者は少なく、特に18世紀の文献中心の国学を理解する人は数えるほどしかない。しかし、たとえ英語への完璧な翻訳が基本的に不可能であるとしても、翻訳に尽力するべきであることに間違いはない。言い換えれば、翻訳の欠点と可能な害を認めるうちで、さらに努力しなければいけないのである。きょうのテーマは、国学の重要な用語を英語に翻訳することである。

翻訳する場合に難問が生じる。また、翻訳は不可能であると考えたのは哲学者であったが、問題と考えた1つは主観性にあった。²つまり、訳する人と訳されたものを読む人との主観性のずれが生じるという問題である。同じテキストを読んでもそれぞれが違うように解釈するであろう。つまり、文学などの訳は同じテキストを使っても、同じように翻訳されることはないということになる。ある理論家は、母国語の支配が決して問題と取り扱われていないということに気づいた。³

その理論家によると、一般的に言えば、国語が統一された現象であることは明白である。だからこそ、母国語として話すものは完全に話せて理解できるのである。しかしながら、言語は、領域、社会階級、学歴及び性別によって変化してしまうものであるから、実際には、1つの国語は同時に多数の言語でもあるといえる。ドイツ人の哲学者ハーバーマス

(Jürgen Habermas)は、通常の人と人とのコミュニケーションについて研究し、社会階級など背景の違いがあってもコミュニケーションは可能であると論じた。つまり、厳密な意味でのものではないにせよ、ある状況があればコミュニケーションは可能であるということであるが、その状況をハーバーマスは理想的なスピーチ状態 (ideal speech situation) と呼んでいる。⁴

当然のことながら、彼は、コミュニケーションしている2人が同じ母国語を話せることについても考えていた。翻訳は、理想的なスピーチ状態においては取り扱えないかもしれない。また、翻訳が本来不可能であるということを認めた場合、訳されたものがどうなるかを分析しなければならない。言語は統一の現象であることは確かであると思っても、1つの言語からほかの言語へ翻訳されたときに、もとのテキストの意味するものが必然的にプラスおよびマイナスされる。言いかえると、翻訳された言語は常に意味を失う。翻訳する言語は新しい意味を与える。その追加された意味と失われた意味は文化的に特有であり、翻訳された意味は原文としか不完全に一致しない。

江戸時代の国学者は、こういう問題をよく理解していた。翻訳の言語はもとのテキストを変え、違うものになると彼らは思っていた。本居宣長などの国学者が古代の研究をする間に、この事実を発見したのである。国学者によると、翻訳に変換されることによって意味は古代日本語に影響を与えた。特に、古代の日本語を歪めてしまったのは古典中国語であるという。賀茂真淵が次のように言っている。

「皇朝はことばを本にて、意はそれに付てわかつ例なり。から國は音を本にて、字を一つ一つに作りて、目じるしとせり。然れば事の本甚異也。かくて皇朝には、から文字を借りて、その言のしるしとするのみなり」。⁵

ある意味で、真淵、宣長及び篤胤が記した言語についての論文は、構造主義及びポスト構造主義に影響を及ぼしたスイス人の言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure) の理論に近づくものであると思う。国学者が基本的に結論をしたのは、外国語の意味するもの (signifier) では日本語の意味されたもの (signified) を表現し得ないということである。日本語の意味するもの、すなわち言葉そのものだけが、日本語が本来意味したものを表現できると思っていた。古代の言語は完全に自然発生的なものであると彼らは信じていたのである。つまり、人間と神との接続は基本的に言葉にあったという。Saussure の言葉を使うと、日本語は自然とのかかわりがあるので、unmotivated (刺激されない) である。⁶

国学のテキスト及び術語を英語に訳する際に、キリスト教から専門用語を借りることがある。米国であるからキリスト教との比較は不可避である。また、篤胤自身が教えを定めることにキリスト教の神学観念を借用していることからしても、キリスト教と比較することはある程度ふさわしいと言えると思う。一方、仏教と儒教との比較はキリスト教の場合よりは可能性が大きい、それについては後で説明したいと思うが、仏教と儒教は広く外国にも伝えられているので、神道のような翻訳の問題は少ないものと思われる。

国学関係について英語で書いている研究者にとっての最初の問題は、国学自体の意味及び翻訳の問題である。研究者がいろいろな翻訳をしているが、「国学」という言葉の翻訳と

しては、nativism、school of nativism、National Studies、National Learning などが使われている。国学を訳する前に、まず、「国学」というものを理解する必要がある。一般的解釈としては、school of thought、あるいは intellectual movement があるが、どちらもよく使われており、適切な訳語でもあると思う。ただし、英語及び日本語の用語には違うニュアンスがあるので、この用語と関連している意味が心に浮かぶ可能性もある。江戸時代の重要な文化制度の1つとして家元制度があるが、家元とのつながり、師弟関係は茶道や能楽などにとどまらず、学問の世界にも流布していた。⁷ 宣長自身がこれをよく理解し、「自分の教えをまねるな」と門人に諭していたという。次のように宣長が言っている。

「吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に、又よきかむかへのいできたらむには、かならずわが説にななづみそ、わがあしきゆゑをいひて、よき考えをひろめよ、すべておのが人ををしふるは、道を明らかにせむとなれば、かにもかくにも、道を明らかにせむぞ、吾を用ふるには有ける、道を思はで、いたづらにわれをたふとまんは、わが心にあらざるぞかし」。⁸

アメリカの文化史の中には家元制度のようなものはなく、intellectual movement や school of thought も、学問という言葉の意味では使われていない。残念ながら、社会と知識人との関係が 18 世紀及び 19 世紀のアメリカと日本は非常に異なっていたために、より適切な用語がないのだと思う。School of thought と intellectual movement に、学問の翻訳としてよりふさわしい比較の言葉がないのかかわらず、nativism としての国学の翻訳が流行することは奇妙である。アメリカ的な考え方からすれば、nativism という言葉は人種差別的なイメージを与える。まして、nativism が学問であると思うアメリカ人の学者は、まずいないのであろう。さらに国学は、nativism であるという観念は、ほかの神道学とか水戸学とかいう類似した学問を無視するものである。国学の単一制度上の識別を認識することはよいと思うし、翻訳として National Studies、または National Learning は悪くはないと思う。これらの用語は、日本についてあまり詳しくない研究者、あるいは何も知らない人と話す場合に役に立つであろう。つまり、形容詞の形で限ればいいのであろう。原則として私の出した論文では、翻訳せざるローマ字の Kokugaku を使用している。

周知のとおり、近世の学問では正統性のことが重要視されているが、これもアメリカの思想史との違いであると思う。思想史として、国学の研究でも正統性を分析する必要がある。英語訳では、「orthodoxy」という言葉を使用する。しかしこの場合、やはり、ある解釈学的な問題が出てくる。まずは、西洋の宗教史の中では、「orthodoxy」と聞けば、キリスト教の東方正教会及びユダヤ教のイメージが心に浮かぶ。したがって、教会あるいは制度としての宗教とのかかわりが西洋では意義深いのであるが、江戸時代の国学ではそうではない。もう1つの問題は、丸山真男が認めたものであるが、江戸時代の思想史では正統性に2つの基本的な意味があった。⁹

丸山は、崎門学派についての論文の中で、師弟関係の教えの伝える習慣が1つの正統性

であるとし“L”と呼んでいるが、これは家元の制度と関連していると思う。崎門学派の門人は朱子学を研究しており、昔から現在までの道の伝えるところに非常に興味を持ち“O”と呼んだ。後ほどまた説明するが、これは朱子の道統と関連していると思う。丸山は、ほかの学問より崎門学派の正統性の関心が強い。国学の場合でも、同じような2つの正統性があったものと考えられるが、篤胤が書いた『玉禪』までは“L”のほうが重要であり、その後、徐々に“O”のほうが目立ってくる。つまり、「orthodoxy」という英語の言葉だけで使用すれば、どちらの場合にも問題が出てくることになるであろう。

国学の正当性との関係のあることは、古道、あるいは古（いにしえ）の道である。宣長と篤胤が古道のことを直接に論じ、荷田春満と賀茂真淵が古道と関連した古代の神道について研究した。古道を解明することは日本の古典の研究目標であると国学者は信じていた。言い換えれば、古道は国学のイデオロギーであり、それがなければ古代の研究をする国学は存在しない。古道への関心をなくして和学は、国学であり得なかったのである。普通、古道は「ancient way」と英訳されているが、アメリカには古道の類似物がないので、「ancient way」はほとんど意味がないようである。「道」という概念は、もちろん中国から入ってきたものであるから、中国の思想史を古道の分析に導入する必要がある。特に、道教及び道学の思想を理解すれば、古道とは何かがわかってくると思う。

古道を説明するときに、平田篤胤は来世の知識の重要性を主張した。次のように篤胤が言っている。

「古へ学びする徒は、まづ主と大倭心を堅むべく、この固めの堅在らでは、真の道の知り
がたき由は、吾が師の翁の、山菅の根の丁寧に、教へ悟しおかれつる。此は磐根の極み突
立てる、巖柱の、動くまじき教へなりけり。斯てその大倭心を、太く高く固めまく欲す
るには、その霊の行方の安定を、知ることなも先なりける。」¹⁰

この篤胤の研究の面を記述するために「eschatology」という言葉を使用するが、中世の神道の専門家が、私が書いた論文を読んで、「eschatology」という言葉を使うことに疑問を持ったそうである。この言葉がカトリックの神学とあまりに深くかかわっているものなので、使用することは適当ではないと言うのであるが、彼の関心が、前述のとおり追加された意味にあるからであると思う。「Eschatology」のかわりに「knowledge of the afterlife」を使用することは、長くて面倒なので使わない。また篤胤は、あるキリスト教の神学の思想を借りているのであるから、「eschatology」を使用することに問題は特にないと思う。

ある意味で「eschatology」と関連している言葉としては、「supernatural」がある。篤胤は化政期に、再生、天狗、幽霊及び鬼神に関する論文を書いた。いまのアメリカでは、これらの現象は「supernatural」の意味に当たると思う人が多い。しかし篤胤の研究を語るときに、この訳語を使用すれば少なくとも2つの問題が出てくるであろう。1つは、19世紀のアメリカの心霊主義とのつながりであるから、もちろん篤胤はそのようなことは知らなかったに違いない。もう1つは、「超自然」と「自然」との境界があることと、それはどこにあるかということとはは普遍的な一致がない。つまり、我々が思う「超自然」は、篤胤の思考に必ずしも合致しないということである。篤胤は、幽霊現象は自然とかかわり

があると思ったのかもしれない。

国学の英語への解釈と翻訳の問題は、三哲及び四大人の概念であるが、どちらも有名な国学者の集団を示す。(以下、OHPを使用して図を示す。) これは三哲ですが、最初のところには契沖法師、その次は賀茂真淵、最後には本居宣長ということです。四大人は、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の生涯を祝う。これは四大人の絵ですが、最初にはちょっと三哲と違いがあるのですが、荷田春満が最初、そして賀茂真淵、3番目は本居宣長、最後には平田篤胤。この次はまた四大人の絵ですが、これはもっとおもしろいと思いますが、同じような図で、4人、春満、真淵、宣長、篤胤。でも、こういうふうに絵をかいたら系統的なイメージを与える。だから、そういうためにこれをつくったといえる。三哲の重要な資料は、村田春海の『歌がたり』と、立綱の『三哲小伝』であり、だから、その三哲の絵は『三哲小伝』の絵ですが、四大人の重要な史料としては、篤胤の『玉禪』と、大國隆正の『学統弁論』がある。立綱が次のように言っている。

「いまの世にありて、高きいやしきいにしへのことをわいたため石上ふるき書をよみ、敷しまのやまと心をはつかにもしる方となりつるは、円珠庵のあさり縣居のをうし、鈴屋のおきな、このみたりのいさになむ」。¹¹

『玉禪』では篤胤は、国学者の生涯について説明し、さらに春満から真淵へ、また真淵から宣長への古道を伝える過程を記述している。四大人の史料であるから、篤胤が古道の教えを宣長から受けたであろうということは連想できる。後に、隆正が篤胤の包含を形式化し、「四大人」という言葉を使用したのである。次のように、隆正が言っている。

「皇国固より大道あり。然れども木鐸のこれを導く者なく、中古より^{このかた}采、外国の学を学び、別して皇国の学を建てんとせず。故に、先皇の伝ふる所の古事殆ど湮滅せり。是に於て、皇天二三の英傑を降して、以てそれをして我が故実を祖述し、我が皇統を憲章するの学事を興さしむ。羽倉先生春満、岡部先生真淵、本居先生宣長、平田先生篤胤、その人なり。」¹²

三哲の史料と四大人の史料には共通点がある。それは国学者の伝記を記述している点である。それゆえ、ある研究者が私に、**hagiography**という言葉を使用するように示唆してくれた。この言葉は、賞賛されたキリスト教の聖人の伝記を示すものなので、適切であるということらしい。しかし実際のところ、四大人の場合はより複雑なのである。

篤胤は、四大人の前の3人の国学者が古道の知恵を永続させたことを主張した。しかし、三哲の史料には古道についての記載がない。これは大変な違いである。四大人の史料には国学者の伝記が含まれているので、**hagiography**に含みうる。ただし、古道の追加された次元ではほかの類別の可能性をも開発している。あるアメリカ人の研究者が提案した1つは、**apostolic succession**である。すごい言葉です。**hagiography**は聖者の生涯を記述するものであり、**apostolic succession**はキリスト時代の主教の系統を示すが、**apostolic succession**という言葉は教えの永続、維持を意味するが、一方、四大人の意味を混乱させてしまうのではないかと思う。

Hagiographyの神学的な含意を避けるために、私は、三哲と四大人を範疇的に呼ぶとき

に、lineage という言葉を使用する。また、四大人の特徴を強調するためには、「道統」という朱子学の用語を借りる。『学統弁論』では、隆正が国学の四大人を朱子の道統に例えている。しかし、四大人という道統は家元制度の道統ではない。江戸時代では家元制度は文化人の間により多くの影響を与えたのであるから、ここでは区別すべきことであると思う。四大人は家元制度と同じような師弟関係を持たなかったのであるから、家元の道統とは呼ぶことはできない。篤胤の場合には、宣長の家元的な後継者は大平であるので、1人の鈴門の国学者が篤胤の養子、鋳胤に篤胤が宣長の後継者であることを尋ねた。鋳胤が次のように言っている。

「このころ或人此祝詞を見て言けらくは故鈴屋大人の学業の道統は大平翁にこそ伝へ玉へれ。然れば、外に有べき事に非ず。さるを此趣にてはいかにぞや思ゆる。又都ての文格も調はざる処ありて信がたき事なりと云へり」。¹³

もちろん、篤胤が大平のような家元的な後継者ではなく、道統の後継者であると気吹舎の門人は信じていたのである。

結論のところに入ります。ある言語から別の言語への透明な翻訳は、基本的に不可能である。言語は統一のものであるという概念は主観性を無視するからである。特に近代までの時代の言語統一のものであると主張しても、ある言語の意味されたものはほかの言語の意味されたものと同じではないので、透明な翻訳は不可能になるであろう。訳されたテキストには元のテキストの意味を変えた新しい意味が付加されている。そのような問題があるにもかかわらず、世界中いたるところで、商業、政府、法律、文化に関する翻訳がされている。これは当然であると思う。国学の研究の場合にも、もし翻訳がなければ専門家ではない人のための国学入門は消滅してしまう。Nativism というような日本文化と関係のない意味を追加した言葉を使用しても、少なくともアメリカ人は理解し始めるようになると思う。翻訳の認識論的な障害があるとしても、文化交流の必要性がそれを克服していくであろう。翻訳は文化の交流を創立するための第一歩なのである。以上です。(拍手)

質疑応答

【司会】ありがとうございます。いろいろ、平田篤胤に関連して翻訳の問題、特に思想史に関連してお出しいただきたいと思います。そして、先ほどのウェイマイヤー先生のお話といろいろ関連を持っていると思います。例えば、ウェイマイヤー先生のお話の中で、国学と国家主義の響きがあるように思われることは、やはり同じく、国学をどういうふうに翻訳するか、**nativism** を翻訳することによって、やはり国家主義的な要素が強いという観念から、結局、そういうふうに翻訳する。あるいは、**spirit** とか **soul** の問題もおそらく、英語の意味をどうしても結局、日本語のものの言葉に同じく英語を与えることは **apostolic succession** か **hagiography** の言葉の同じ問題が出てくると思います。それでは、質問と討論に入らせていただきたいと思います。

【井上順孝】国学の訳に **nativism** というのを4つぐらい挙げられておりますが、英語圏で4つが代表だとすると、順番というのでしょうか、どんなふうに翻訳が展開してきたのかがわかったら教えてください。

それから、どの言葉が一番よく使われて、どれが一番人気ないとかいうこと、事実関係をちょっと教えていただきたいと思います。

【マクナリー】1番目は順番のことですが、特に順番はないです。

【司会】時期的に……。

【井上】つまり、最初にどの翻訳が使われて、時代的に、もしわかれれば教えてください。

【マクナリー】わからない。私はまだ若いから（笑）。

【司会】年寄りの立場から（笑）。おそらく、けっきょく **National Learning** か **National Studies** かがもともと使われていたと思います。80年代からおそらく、ハルトゥーニアン先生の本で **nativism** という言葉が使われたと思います。そして、**National Learning** では、やはり英語では何を意味するかあまりピンと来ないと思います。そして **nativism** は、マクナリー先生がおっしゃったように間違っただけの印象を与えるかもしれません。何となく **nativism** と言えばはっきりした印象を与えてくれるので、おそらくいまはそちらのほうが人気があるかもしれません。

【マクナリー】ノスコ〔ピーター・ノスコ〕という研究者も、国学の翻訳として **nativism** を使った。

【井上】それでは、いまは **nativism** が一番多く使われているということですか。

【マクナリー】たしか、そうです。でも私が書いた本を出版したら変わると思う（笑）。

【マセ(François Macé)】フランス語の場合は、**étude de national** の問題を扱いますが、最近ノスコのほうの提供で **nativism** ということが英語になって、本当だと思います。

【安蘇谷正彦】**Nativism** の意味は、真淵の場合にそういう自然主義みたいな意味があると思うんです。だから、それで使ったのでないかなという感じはします。それと、私も **National Learning** とか **National Studies** とかこういう直訳的なものでわかるはずがない

と思っています。ただし、ancient way というのが、いまマクナリー先生は「これはよくない」と言ったのですが、Taoism の場合の Tao は way なのです。

【マクナリー】両方あります。

【安蘇谷】だから、その意味で「way」を使えば、つまり国学が、要するに、Japanese national classics を通して、そういう道を求める。Ancient Tao というふうに理解すれば、本当はいいわけなのです。ですから、Ancient way を Way を大文字で Kami Way みたいに考えれば、そんなに捨てたものでもないかと思えますけれども。

それから、ちょっと気になったのは、eschatology という場合がいいんじゃないかという点です。篤胤の場合キリスト教との関係があるから——確かに関係あるのですが——おそらく、キリスト教の eschatology の意味は、つまり、人類が始まって終わったときの「eschatology」であって、平田篤胤の「eschatology」は違うのです。個人が亡くなったあとどうするかということでのことなのです。ですから、eschatology は、私はちょっとまずいのではないかと思います。

【マクナリー】knowledge of the afterlife のほうがいいと（笑）。

【安蘇谷】そうではなくて、そのほうがわかりやすいでしょう。だから、国学の訳はむしろ、なぜ national という言葉を使ったかという、当時、やはり江戸時代の学問が、儒学ですから、儒学の学問に対して national classics を主張したのが国学者ですから、だから、national classics learning という意味が通じるのかどうかかわからないですが、まだそのほうがわかりやすいかもしれません。少なくとも、古典の研究が国学であると私は思っています。

【マクナリー】やはり、「eschatology」を使用することは私にとってもちょっと……。まあ、一番初めに聞くときにわからなかったのです。専門的な言葉だから何も知らなかった。それはそうだと思います。そして、nativism の国学の翻訳として、先生がおっしゃったように、ある程度自然との関わり……。

【安蘇谷】Naturalism ですよ。

【マクナリー】そうそう。まあ、英語では nativism は特にそういう意味はないわけです。

【安蘇谷】ないんですか。

【マクナリー】全くない。だから、nativism は、もともと 17 世紀イギリスから……。

【安蘇谷】ルソーがナチュラルリズムみたいなことを言ったというのと似ているという言い方で、私は、nativism という言葉を使ったのかと思ったのですが、naturalism のほうがわかりやすいですね。

【マクナリー】そうですね。

【安蘇谷】真淵の場合は、非常にそれがはっきりしていますよね。

【マクナリー】はい。naturalism のほうが、はっきりわからないんだけど、西洋の歴史の中では romanticism と naturalism があるでしょう。だから、そういう意味が心に浮かぶ。

【安蘇谷】それに近いことを、やはり真淵は言っていますから。

【マクナリー】それは、naturalism のほうがもっと近いと思いますね。

【安蘇谷】まあ、こういうのは使わないほうがいい。

【司会】どうぞ。

【岩沢知子】ボストン大学で宗教哲学を専攻している岩沢です。いまのご発言で、先生の eschatology の問題にかかわって1つご質問したいと思います。先生がおっしゃいましたとおり、eschatology という言葉を使った場合に、英語のニュアンスとしては、やはり終末論ですとか、進歩史観、リニューアルヒストリーの観念がそこには非常に強いと思うのです。ですから、終末論というのがそうしたキリスト教的なバックグラウンドを持っているのに対して、——平田篤胤を私も少し勉強したいと思っているものですから——、平田篤胤が出してくるコスモロジーというのを先生におうかがいしたいのです。『靈能真柱』などで、3つの世界観を出してまいります、その世界観というものがそういう西洋的な、非常に進歩史観のようなものを彼が意識していたとしたら、これは eschatology に近くなるかもしれませんが、私はそのところを先生が、彼自身のコスモロジーに関して西洋的な進歩史観的、線的なヒストリー観を前提として考えていらっしゃるのか。それとも、全く別のものを先生はお考えなのか、そのあたりをぜひお聞かせいただきたいと思います。

【マクナリー】1つは、eschatology の使い方についてですが、私はキリスト教の信心が深い人間ではないから eschatology の本当の意味はわかりません。ある程度問題になると思います。もう1つは、先生がおっしゃったような西洋の影響とか、そういうことについてはあまり研究していません。『靈能真柱』のなかでの議論については、そこまではまだ研究していません。

【安蘇谷】少なくとも、『三大考』に関しては、本居宣長が服部中庸の絵を自分の『古事記伝』の中に採用していますから、これは篤胤がつくったわけでもない。『靈能真柱』そのものは、宣長が黄泉の国へ行くということを批判したかったというのが一番基本ですから、1人の人間としての死の問題に対する回答というふうに理解すべきであって、終末論 eschatology とは全く違うと思う。そういうふうに理解するのが事実としては正しいというふうに、私は思います。

【司会】松本先生。

【松本久史】國學院大學の松本です。Nativism の問題についてどう訳すかということで、非常に私も悩んでおりまして、タイトルだけを訳すときにどうしようかなと。nativism は使いません。それがなぜ使われるのか、ハルトゥニアンさんのものは平田学から来ているのですかね。いわゆる草莽の国学という、その中の土俗的な精神信仰であるとか、そういうようなところを吸い上げていく平田学などを見ていて nativism というふうにつけたのかなというふうに私は理解していました。

もう1つは、国学自体、日本の学問の中において「国学」という言葉自体が非常に揺れがあります。例えば、国学＝神道ではないということは、いろいろな文芸もあるし、村田春海みたいな人もいます。存じだろーと思いますけれども、「国学」という言葉自体、いわゆる四大人は使っていません。主體的に自分は古学であるとか、本教学であるとか、そう

というような使い方をしている。そういう意味で、日本の問題、先ほどのタマの問題と一緒に、日本の中においての用語がうまく整理されていない。

例えば国学、特に明治以降、明治 20 年以降ぐらい国学というふうなものが定着したと、これは皇學館の牟禮（仁）先生などもおっしゃられています。そういう意味で、**nativism** と **National Learning** と英語でもそういうぶれがあるように、日本のほうでもちょっとぶれがあるという。ちょっとそういうことも考えに入れていただきたい。

【マクナリー】ありがとうございました。先生がおっしゃったことは正しいと思います。つまり、「国学」という言葉は篤胤とそれ以前あまり使っていなかった。篤胤も「国学」という言葉を使った。しかし、ほとんど「古学」とか「いにしえまなび」のほうを使っていたのだから、実際には翻訳として **Ancient Learning** のほうが正しいと思います。でも、英語の研究の中では、もうすでに **Ancient Learning** という言葉を儒学のほうで使っている。だから、混乱させてしまうから国学のほうは **nativism** となるのです。

【司会】いかがですか。

【島蘭進】**Eschatology** の話で、安蘇谷先生が断固として否定されましたので、ちょっと発言します **eschatology** には、人類全体が 1 つの方向へ向かっていくという言葉と、しかし、たぶん個人の死について、個人が死んで最後にどうなるかという意味もあるんでしょうかね。キリスト教神学では……。

【マクナリー】両方あります。

【島蘭】そういう意味で、マクナリー先生は **eschatology** という言葉を使われたのだと思います。ですから、**eschatology** という使い方もあると思いますが、やはりここは **knowledge of the afterlife** と……。日本人だと「他界観」という言葉をよく使うようですが、それはどう訳されますでしょうか。

【マクナリー】それは翻訳しにくい（笑）。

【島蘭】**View of the other world** とか **view of the afterlife** とか、そういうふうに考えると、**view of the afterlife** というのは、さっき欧米の心霊主義のことが出ましたが、そういう心霊主義の人たちが出てきたのは普通の人の **view of afterlife** というものを新たにシステム化しようとする運動だったと思いますけれども、そういうものが出てきたということと、平田篤胤のような人が日本の豊富な理論をシステム化しようとしたことは、全く東と西の別の世界の言葉だけれども、ある程度で共通点があるのです。

そういうふうに考えると、もしかすると、**view of afterlife** というものが適切な訳語で、日本で神道というところから出てきたコンセプトがある種の世界的な同時性というか普遍性、そういうものを持っている。そういうふうなことが、こういう翻訳の中から見つかるという例に当たるのではないかと思います。

これは、マクナリー先生のお話からちょっと思いついたことですが。先生が **knowledge of afterlife** というのがよくないと思われる理由を、もう少し説明していただければと思います。

【マクナリー】ただ長いからというだけで、それ以外の理由はない。もし心霊主義と関連

している言葉、supernatural とかを使うと、向こうの何も知らないアメリカ人はそういうことに関心を持っているから書いた論文を読む。だから、それは悪くはないと思います(笑)。でも、篤胤の考え方に合うか合わないかは問題になりますね。

【司会】はい、井上先生。

【井上】また国学の問題に戻りますが、実は我々のプログラムも、英訳は Establishment of a National Learning Institute (笑)。要するに、もう流行っていない言葉を使っていることになっているわけです。Nativism というのは、やはり我々の感覚としてはどうもしっくりこないということがあって、こちらのほうを選んだと一私は関与していないのですが一推測しています。これは、英語圏で翻訳しているとか、我々はこう言っているというのではなくて、やはり共同で統一して、どう一番いい訳があるかをこの会議で議論したらどうか。最終的に決まらなくても、煮詰める方向でやったほうが生産的かと思います。結局、今度は英語だけではなくてフランス語とかドイツ語とか、ほかの言葉に訳すときにも、英語の場合は「国学」を訳したということが1つの参考になると思いますので。

過去は過去として、より正確に、いま例えば國學院で国学をやるといふときの意味と、それをいろいろな言葉でやったとき、英語圏の人に一番真意が伝わる言葉は何だろう。これをちょっと、できればいろいろ言っていただくといいかなと思います。いろいろ意見を出していただいて、むしろ将来を見た訳語ということで議論していただければと思います。

【マクナリー】私は、国学を翻訳するときローマ字ばかり扱うから。安蘇谷先生がおっしゃったように、naturalism のほうが正しい面がある。でも、naturalism は翻訳ではない。解釈ということですから。

【司会】個人的に言わせてもらえば、やはり、nativism は批判的な意味を含めていると思います。やはり、nativism は妄信家、そういうニュアンスがありますので、nativism という場合は、あらかじめ何か非常に狭い物の見方をする印象を与えたいと思います。ある意味ですごく使いやすく、結局こういうような国家主義的な狭い物の見方という、納得しやすい印象を与えたいと思います。ですから、nativism、できれば Kokugaku というローマ字の使い方がいいのではないかと思います。

ですが、それは結局、日本学を勉強している人たちの中ではそういう Kokugaku が通じると思いますが、もっと広く一般的な方にわかってもらうためには Kokugaku は知らない言語、言葉になりますので。できれば、もっといい翻訳を開発することができればいいと思いますので、ほかに何かご意見があれば。どうぞ。

【関守ゲイノー(Gaynor Sekimori)】自分の意見だけですが、いつも国学の、「国」を nationalism の national という言葉にして使っていますが、どうして national にするのでしょうか。先生がおっしゃったように、日本の Classics Studies を指していますから、国学は、もとの意味として翻訳すればいいではないか。英語にすごく批判的な深みがあると思いますから、それはできればやめるほうがいいのではないかと思います。

【司会】たとえば、Japanese Learning とか。

【関守】それでもいいのですが、とにかく national をやめましょうということです。

【司会】どうぞ。

【山中弘】筑波大学の山中ですが、いまの話との関連で思いつきましたが、先ほどの前のご発表でも出ていましたが、例えば、本居や平田の考え方の中にも非常に愛国的な、つまり、「^{くに}国」という問題を思想の中に入れ込んでいくという、その問題がどうしてもあるので、単にいま出てきたような形で日本の古典を学ぶとか、さっき出てきた *ancient learning*、そういうのでは話としては落ちてしまうものがある。だから *nativism* という問題がまた出てくるわけです。

その意味では、日本の古典を学ぶというような観点の中にある非常にナショナリスティックなものをどうやって翻訳の中に反映していくかということがないと、私はうまくいかないのではないかと個人的な意見として感じました。

あと、もう1点。先生のご発表のタイトルですが、「解釈学的な算術としての国学の翻訳」という、これはどういう意味かというのがよくわからなかったので、できればこの意図についてちょっとお話しただければと思います。

【マクナリー】つまり、このタイトル自体が翻訳ですよ。だから、そのプラスマイナスされるところ、意味を追加することと意味を失うこと。だから、算術。もともとは *arithmetic*。

【山中】よくわかりました。

【司会】はい、どうぞ。

【石井研士】國學院大學の石井です。先ほど井上先生からも、タイトルが実は「*National Learning Institute*」になっていて古くさいと言われましたが、そのタイトルをつけた当人の一人なのです(笑)。我々が考えているところを少しみなさんに紹介して、議論がさらに進めばと思って提案させていただきます。

英文のタイトルをつけるときに、こういうことを考えておりました。実際には、この席にもいるヘイヴンズ先生に英語のタイトルをお願いしたのですが、そのときには、*nativism* は全く頭にありませんでした。

我々が考えていたのは2つで、1つは国の基といいますか、日本の文化の本質にかかわるものは何なのか。もう1つは、現代日本における文化的なアイデンティティの問題です。それを「国学」という言葉で考えたときに、もちろん国学というのは近世のある学問でもありますが、いまの2つのような国の本質、国の文化と文化的なアイデンティティの問題を考えたときに、*National Learning* という言葉がふさわしいと我々は考えていたということをちょっと申し述べたいと思います。

【マクナリー】アメリカの歴史は大部分日本と歴史が違うから、国家でないアメリカというものを、普通のアメリカ人は想像できない。つまり、国家になる前のアメリカは植民地であるから、2つの言い方がある。*colony*、*country (state)*。だから、国学とか翻訳する場合に、すぐ *national* か *nation* が出てくるという歴史的な違いもある。

でも、この國學院の翻訳のときは、*National Learning* としての翻訳は悪くはないと思います。研究ではなくて、政治に関連した翻訳が必要あるから。だから、問題ないと思います。でも、研究のとき、論文を書くときも言ったように翻訳せずにローマ字の形で使用

しています。

【司会】國學院の翻訳に携わった Havens 先生はどういう…。

【ノルマン・ヘイヴンズ】別に選択を弁護するというつもりはないのですが…。はっきり言って、国学的研究発信という表現を初めて見たときに哑然として、何の意味を伝えようとしているのかなと思ったけれども、とにかく **nativism** はまずい。だけれども、国学がある以上、これは歴史的な国学という連想も避けることはできないと思ったので、一番無難な選択として **National Learning** にしました。

【司会】はい、島菌先生。

【島菌】マクナリー先生のお話を伺っていると、翻訳をするということは、コミュニケーションできないところを何とかコミュニケーションを始めるというか、そういうアクションが入ってくるということですね。そういうことから言うと、例えば国学というのをそのまま使ってしまうと、あきらめるのが早過ぎるというか。もう一回、何とか自分の言語に移すことをやった後で、——どうしようもないならばそのまま使ってもいいのですが、——そういうことがあったほうがいいのではないかと思います。ですから、**National Learning** にしろ **nativism** にしろ、そういう言葉を使ったほうがいいと思います。

例えば、**nativism** も **national** も、多分アメリカと比べれば日本の中では、日本の言語の中での対応物の響きはそんなに悪くない。**native** というのは、「土着」と訳せばそんなに悪い意味ではない。そして **nativism** は、私はハルトニアンさんの本は読んでいませんが、リントンという人の研究があります。リントンの **nativism** は、そんなに悪い意味は入っていない。

日本の中では、「土着的」ということは民俗学がずっとやってきたことであって、国学から民俗学へ続いてわれわれの現代の日本の文化につながっていることであってそう悪い意味ではない。それから、国学というときの **national** という意味は、普遍主義が絶対に価値だという信念が非常に強くある場合に、普遍主義に対立するものとして **national** なものが非常に狭いもの、限定をしているということになると思います。そういうニュアンスは、必ずしも日本ではないので、そこは価値観の違いが出てきてしまうということを明るみに出すというか、そういうことが翻訳には必要なことではないか。

そこから新たに見えてくることがあり、お互いの違いを意識し合う、自覚し合う、そういう作業が翻訳に入っているので、そこを何とか努力して、こうやって、**nativism** がいいのか、**National Learning** がいいのかという議論をするためにも、やはり **Kokugaku** とそのまま使うのはできるだけ最後までやめる方向で努力をしましょう。

【マクナリー】もちろん、アメリカだけが英語の国ではないでしょう。イギリスもあるし、オーストラリアもある。だから、国学を翻訳するときにアメリカを想像していない人はいるはず。だから、まあ何でもいい（笑）。「アメリカ＝世界」というわけではないから。だから、もしイギリスとかオーストラリアとか、ここに今いらっしゃる人。だから、**nativism** はどういう意味ですか。

【レヴィ・ミクロークリン(Levi McLaughlin)】カナダではあまり使わないです。

【マクナリー】カナダ、ああ、そうですね。

【ミクロークリン】Nativism と聞いたら、原始民族という意味がある。

【マクナリー】アメリカにいる Native American…。

【ミクロークリン】Native American ではないですね、Natives。

【マクナリー】American は continent (大陸) の意味もありますから。

【ミクロークリン】そうではない (笑)。あとは、特に形容詞として nativistic、nativism というふうに言ったら、結局、原始民族観みたいな感じがあって…。だからあまり書かれていない。

【マクナリー】アメリカと大分違いますね。

【ベンテリー】結局、私は National Learning という用語を使って、その後に括弧の中に Kokugaku とするのが一番無難だと思います。

【マクナリー】日本に来る前に、アメリカの歴史を研究している友達に「nativism という意味は何ですか」と聞いたときに、彼は特に 19 世紀の末ごろ、その意味についての問題があると言った。ある人が違う国からアメリカに入って来た。だから、その人たちを攻撃をするためにこういう nativism という言葉を使った。だから、よくない印象があります。

【司会】はい、どうぞ。

【チャールズ・ドウウォルフ(Charles DeWolf)】特に 19 世紀の反移民の精神は、反カトリック精神ですね。

【マクナリー】はい、そうです。

【ドウウォルフ】ですから、歴史の問題だけではなくて、いまでもアメリカのカトリック信者の伝統、意識、アイデンティティの問題として残っているわけですね。古い言葉ではなくて、ある意味で生きている言葉ですから、変な共通点もあるかもしれません。やはり自分の国の文化を守りたいという精神があって、筑波大学の山中先生がおっしゃったとおり、その意味も伝えなければいけないと思います。National Learning はこなれていればいいのですが、何となくつまらない感じがします (笑)。

【司会】個人的な意見を言わせていただければ、いま日本では国史・国文から日本史・日本文学に替える時代になっているので、School of Japanese Learning が一番いいのではないかと思います。國學院の名前は替えるわけにはいかないと思いますので、天照大神と同じように使って。ですから、ここは結局、Institute of Japanese Studies か、Institute of Japanese Learning を翻訳すれば非常に正確な意味も伝わると思います。

ほかに、ご質問・ご意見はいかがでしょうか。はい、どうぞ。

【門屋温】早稲田大学の門屋です。Nativism が随分盛り上がっているみたいですが、確かに nativism というのはある一面非常によく言い当てていると思います。でも、ある一面であって、結局どの言葉を使っても常に短し櫛に長しで、1 つに決めてしまえばどこかで損はする。

ですから、基本的にはその場その場でコンテキストで間尺に合った言葉を使っていくしかないと思います。でも、それだとかいう議論をしている意味がなくなってしまうので。

では、なぜこういう議論をするか。さっき井上先生がおっしゃったように何か決めたほうがいいのではないか。それが、決めることにどういう意義というか機能、効果があるかを考えたときに2つの面があると思うのです。

1つは、さっき中井先生もおっしゃったように、この翻訳をだれが読むかを考えたときに、ここにいらっしゃるような人たちは日本語でそのまま読めるような方たちがほとんどです。それだったら、*Kokugaku* といってもほとんど問題ないわけです。

ところが、多くの場合翻訳を読むのは、先ほど中井先生がおっしゃったように大学生や大学院生であつたりする。あるいは、いま英語圏の話ばかりしていますが、例えば、フランス語圏やドイツ語圏の人でもフランス語訳やドイツ語訳のふさわしい本がなければ、とりあえず英語で書かれたものを読む人が多いわけです。ですから、専門研究者、深い研究者ではない知識があまりない人たちが主にその翻訳を読む対象として考えられる。そうすると、そういう人たちにとって誤解を与えないでふさわしい意味をおおむね伝えられるような言葉とは何か。それは、井上先生が言ったように決めていかなければいけないと思います。

それとは別に、専門の研究者の間でそれをどう表現するかという問題はまた別のレベルで、それはこういう場で議論をして批判をしながら鍛えていく必要があるし、その過程では当然、英語のほうだけではなくて、先ほどから問題になっているように、——靈魂観のお話をされていましたが、——日本の研究者の中でもその定義が曖昧になっている部分は当然突きつけられてくるわけです。それを検討しながら鍛えていくという、その2つのことを使い分けながらやっていかないと、全部ごった煮で言葉、単語を決めましょうというやり方では、どうやってもうまくいかないような気がします。そういうふうに、使い分けをしたらどうかと思います。

【司会】ありがとうございます。ほかに何か、ご質問・ご意見はありますか。

【井上】レジュメの5番目に *apostolic succession* とあって…。全体としてやはり、先ほどの *eschatology* もそうですが、キリスト教的なニュアンスを含む言葉を国学に当てはめていくことがいいのか、悪いのか。なるべくそれを避けて、一般的な用語でそれを表す方法もあると思います。

例えば、これ *four main masters* とか、そういうことがあり得るかどうかわかりませんが、どうしても *apostolic* を日本語で言うと、使徒たちとか、キリスト教系のニュアンスにどうしても引きずられます。それが、英語圏だと余計にそうかもしれません。その点で、先ほどの *eschatology* もそうで、長いというだけで避けることはないで……。Knowledge (of the afterlife) のかわりに *view* ということでもいいし、そちらのほうがどちらかと言うと、これは私の個人的な考えですが誤解を生まないのではないかと思います。逆に英語圏の方からご意見をお伺いしたいと思います。まあ、どちらも宗教的なお話ですから使ったほうがよりニュアンスがあるということと、もう1つの宗教のコンテキストに引きずられてしまうから、できれば一般的な用語にする。これは戦略ですが、ほかの方のご意見をいただければありがたいと思います。

【司会】ありがとうございました。ここでもう1つの問題が出てきたと思います。それは、「神道」という言葉をどういうふうに……。例えば、日本の思想史か宗教史を教えるときは、古代の「神道」という言葉を使えばどういう印象を与えることになるかという問題が出てくると思います。日本語の中で、例えば、神信仰か神道という言葉避ける傾向があると思いますが、今度、神道をどういうふうに定義するか、翻訳するかということになると思います。

本日は、ウェイマイヤー先生、マクナリー先生、ありがとうございました。(拍手)

【井上】ありがとうございました。きょうは、「国学の部」ということでセッションを行いました。明日は「神道古典の部」ということで、国学者が対象にしたものそのものに今度は焦点が当てられます。そして最後に総括討論がございますが、既にきょう大きな問題が出てしまったわけですね。国学の訳、それから神道のそれをどうするかという点ですね。それから、マクナリーさんが出されて十分に議論されていない点もあると思いますので、そうしたことは最後に総括討論でぜひ扱いたいと思います。その間に皆さんにも考えておいていただければと思います(笑)。きょう出された問題はある意味で根源的な問題ですので、パッと答えが出るような問いではないと思いますが、一晩寝るとまた新しいものが出てくるかもしれませんので、それを練っていただいて、あしたの総括討論でもう一段レベルアップした議論になれば我々としてもうれしいと思います。

きょうは本当にいろいろな方にご質問いただき、盛り上げていただいてありがとうございました。「国学の部」はこれで終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

¹ Jacques Derrida, *Acts of Literature*, edited by Derek Attridge (London: Routledge, 1992), p. 257.

² Naoki Sakai, *Translation and Subjectivity* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1997), p. 11.

³ Naoki Sakai, *Voices of the Past: The Status of Language in Eighteenth-Century Japanese Discourse* (Ithaca: Cornell University Press, 1992), p. 13.

⁴ Seyla Benhabib, *Habermas and the Public Sphere* (Cambridge: MIT Press, 1992), p. 89.

⁵ 遷飛麻那微、日本思想大系第39巻(岩波書店、1972)、371頁。

⁶ Ferdinand de Saussure, *Course in General Linguistics*, translated by Roy Harris (La Salle: Open Court, 1983), p. 130.

⁷ 西本松之助『家元の研究』(校倉書房、1975)、105頁。

⁸ 『玉勝間』日本思想大系 第40巻（岩波書店、1978）、73頁。

⁹ Maruyama Masao, "Orthodoxy and Legitimacy in the Kimon School," Part I, translated by Barry Steben, *Sino-Japanese Studies*, vol. 8, no. 2, p. 30.

¹⁰ 『靈能真柱』日本思想大系第50巻（岩波書店、1973）、12-13頁。

¹¹ 『三哲小伝』、1丁ウラ。

¹² 『学統弁論』日本思想大系第59巻（岩波書店、1973）、460頁。

¹³ 『毀誉相半書』新修平田篤胤全集補遺第5巻（名著出版、1980）、479頁。